

【書評】

北野収・西川芳昭 編著

『人新世の開発原論・農学原論 内発的發展とアグロエコロジー』

(農林統計出版, 2022)

古沢 広祐*

はじめに

本書は、「開発原論」「農学原論」をタイトルに明記しているように、人新世と呼ばれる現代世界での学問のあり方、とくに開発学と農学のあるべき姿について、その本質を問い直す意欲的な書籍である。原論という言葉は、最近はとみに使われなくなり、研究室の名称でも・・・原論教室は、その多くが姿を消してきたのだった。御多分に漏れず、私がかつて所属していた「農学原論教室」もその一つである。

書評するにあたり、最初に、評者の立ち位置について簡単にふれておきたい。それは、第一にタイトルにある4つキーワード、開発、農学、内発的發展、アグロエコロジーは、いずれも評者自身が長年にわたり関わってきたテーマであった。とくに本書で論じられている柱立ての一つ「農学原論」については、冒頭でふれた通り評者が大学院にて所属していた旧「農学原論教室」(現・京都大学大学院、農学研究科生物資源経済学専攻、農学原論分野)であったので、本書で論じられている内容については、事例や研究者、実践者など、いずれも少なからず親しみ深いものであった。

また開発学や内発的發展論さらにアグロエコロジーに関して、評者自身が、研究とともに社会運動(NGO/NPO)関係者としての立場か

ら、長年にわたり関わってきた現場や諸事象と多少とも重なり合うものが多くあった。その点では、本書の内容の詳細に踏み込むと、論じきれないほどの論点を多数抽出して掘り下げてみたくなる内容である。しかしながら、書籍紹介という意味合いを加味した書評としては、多くの一般読者に対しては個別的な事柄への深掘りは出来るだけ避けることにしたい。つまり、本書が提起しているより重要な根本的テーマに焦点をあてた論評ということ意識して、本稿では出来るだけ本書が目指す原論的な問いかけを中心に論じるように心がける。

本書の構成

本書は基本的にはお二人の編者、北野収氏、西川芳昭氏が抱いてきた長年の問題意識を現時点で集大成したものである。各章の具体的な事例としては、関係者・教え子の八名が加わって著されている。全体はⅢ部の構成で、総論的な序章・終章とともに各論的な8つの章から組み立てられており、本書の主題となる原論的な問いと展開は、主に序章と第八章、終章にて示されている。

第Ⅰ部は、〈あの国、あの人たちは「遅れている」のか〉という挑発的なタイトルを掲げて、従来の発展論や開発論が内在してきた偏見と欺瞞性への反証的な事例として、モザンビークと

ネパールが取り上げられている。第Ⅱ部では、〈農業・市場・社会〉をテーマにして、タンザニアと日本の有機農業の事例やフランスのアグロエコロジー、イタリアの社会的農業の事例が紹介されている。第Ⅲ部では、〈内発的発展と食料主権〉をテーマとして、イギリスとカナダのCSA(地域支援型農業)の実践事例、タンザニア地域社会の主体性回復と内発的発展事例、越境する小さな農的連帯としてCSAとフェアトレードの展開が論じられている。

それらの内容がわかるように、以下に目次立てを示しておこう。とくに原論的な展開の内容の理解のために、序章と終章については、中の見出しも示しておく。

序章 二十一世紀の開発原論・農学原論について語れば(北野収)

- 1 編者のなかにはあり続けた問題意識
- 2 三十年前、一九九〇年代に考えていたこと
- 3 二〇二〇年代の今、考えていること
- 4 チヅ子先生のこと
- 5 原論としての開発、原論としての農学を思い出すために
- 6 本書のアグロエコロジー観
- 7 内発的発展における中間領域と市民・民衆
- 8 むすび

第Ⅰ部 あの国、あの人たちは「遅れている」のか

第一章 モザンビーク農民の生活世界にみる性・生計・裁判(田村優)

第二章 ネパールの歴史都市とキー・パースンにみる内発的発展論—カトマンズ盆地でのフィールドワークから—(米川安寿)

第Ⅱ部 農業・市場・社会

第三章 貧困軽減と食料安全保障の手段としての有機農業(宮下智衣, K. M. カウンゼ)—タンザニア・モロゴロ州での農家調査から—

第四章 日本の有機農業における贈与と脱商品化(ルロン石原・ベネロブ, 須田文明訳)

コラム フランスのアグロエコロジーと有機農業(須田文明)

第五章 農業と社会をつなぐ包摂の場—イタリアの社会的農業—(中野美季)

第Ⅲ部 内発的発展と食料主権

第六章 CSAの実践による越境する持続可能な社会形成—イギリスとカナダの現地訪問から—(西川芳昭)

第七章 「本当の幸せ」のための開発と発展を求めて—タンザニア地域社会の主体性回復と内発的発展の試み—(下田道敬)

第八章 時空を超えて越境する小さな農的連帯—CSAとフェアトレードのバイオニアたち—(北野収)

終章 人新世に再考する開発原論・農学原論内発的発展論と生命誌論を参考軸として—(西川芳昭)

- 1 改めて開発をめぐる世界の動向を見直す
- 2 内発的発展論を振り返る
- 3 農学原論・農本主義を振り返る
- 4 国際的に注目されるアグロエコロジーとその課題
- 5 内発的発展論と近代科学を結ぶ生命誌論
- 6 内発的発展論を組み込んだ新しい農学原論・開発原論の可能性
- 7 二〇五〇年に向けて考えていくこと
- 8 むすび

本書が提示する問題と展望

編者のお二人は、1980年代の学生時代に共通して触発された問題意識として、鶴見和子や西川潤などが提起してきた「内発的發展論」との出会いがある。そして、その後に行行政官・JICA職員としての実務を経験した後、研究者・学者へと転身して、ともに国内外でフィールドでの学びと研鑽を積み上げてきた方々である。共通するのは、途上国の開発現場での従来型の開発協力や開発政策の矛盾や欺瞞性を体験しており、その新自由主義的な開発を克服する道を其々に模索されるなかで、新たな可能性に光を当てようとしてきたのであった。

その問題意識と背景についての詳細は、本書をぜひお読み頂きたい。長年のそうした問題意識を踏まえた上で、現状からもう一歩先を見通そうとの模索と努力の結実が、本書の大きな特徴といつてよかろう。とくに本書で取り上げられている具体的な開発実践・農的実践を挙げると、以下のような多彩な事例となっている。それらは、一言でくればグローバル経済と巨大開発の波への抵抗として、地域主義や自治・地域主権を取り戻そうとする活動展開（ローカリゼーション）と見ることができるだろう。

その活動事例とは、カナダの100マイル運動とジャスト・アス！（フェアトレード協同組合）、米国のシビック・アグリカルチャー、メキシコのUCIRI（イスモ地域先住民族共同体組合）、ラテンアメリカの解放の神学、日本の有機農業運動・大分県一村一品運動・熊本県水俣市もやい直し、ネパールの地域リーダー論、英国のCSA、フランスの有機農業、イタリアの社会的農業、タンザニアの有機農業と地域づくり、モザンビークの農村社会、などである。

地域的な背景と特徴としての違いはあるのだ

が、取り上げられている事例を見るかぎり、世界的な視野から内発的な開発実践や広義のアグロエコロジー的な農的実践の代表例が示されており、それぞれから触発される点は多くある。だが実際には、それぞれの事例については社会・文化・政治的な背景と歴史的経緯があるので、簡単には共通項を見出しにくい点があることには留意したい。しかし、人新世と呼ばれる時代的転換点に差しかかった状況下においては、パラダイム転換的な視野からの事例抽出としては興味深いものである。

以下、各事例の内容には踏み込まずに、キーワードである開発、農学、内発的發展、アグロエコロジーについて、本書の視点や展開された内容をふまえつつ評者の視点を加味しながら簡潔に論評することにした。

本書が追求する原論的な課題

開発をめぐることは、困難な時代状況下で国連のSDGs（持続可能な開発目標）など積極的展開があり一定評価しつつも、近代化論ないし新自由主義的要素も含み込んでいる点をのり越えるべく、本書はそもそも論として開発論・農学論を提起している。その前提ないし実践的な草分けとしては、日本での有機農業運動や新しい農本主義的な展開（宇根豊ほか）を評価するとともに、国際的には社会変革をも視野に入れたアグロエコロジー的な拡がりに期待する。その根底については、自然と人間の深い結びつきを「生命誌」から捉える見方（中村桂子）に注目して、内発的發展論（鶴見和子・中村尚司ほか）や「在所の思想」「伝統の再創造」とも結びつけて、開発原論・農学原論が示されているのである。

新たな希望への手がかりとしては、世界的に広がる農民的な連帯運動（アグロエコロジーの展開）ないし広義の社会的連帯経済を視野に入

れた動きに期待しつつ、「市井の人の横のつながり・連帯の基礎としての、開発原論・農学原論」(本書終章, p.237)を想い描いている。こうした展望や期待は、評者としても似たような経験や視点を共有してきたことから、ほぼ全面的に賛同するところである。賛同と共感を前提にしつつも、多少とも課題ないし今後に向けての展望については、評者自身はあまり楽観視できない点があると感じている。現状への個々の取り組み以上に、より大きな枠組みや視点が必要ではないかと思うからである。今後への期待を込めながら、その点を一言だけ付記して、書評を締めくくることにしたい。

1970年代から80年代は、石油危機や成長の限界論が提起されて、エコロジーや地域主義などのオルタナティブ(代替的展望)が提起されたのだった。その一端に身を置いてきた評者は、70年代の学生時代に有機農業運動や反公害・自然保護運動などに直接関わる経験をしてきた。その後の80年代から90年代にかけて、時代は東西対立が解消される一方でグローバル資本主義が世界を席卷する時代に入ったのだった。1992年の地球サミット(国連環境開発会議)など、持続可能な地球市民社会へ向かう兆しも一時的に現れたのだが、現実には資本主義的な市場経済競争とグローバリゼーションの大波にのみ込まれて、貧困・格差の急拡大や地球環境危機の深刻化が進展したのだった。

こうした経緯をふまえると、本書が目指す動きは、かつての社会的運動の再活性化のように見えてくる。その意義を評価し認めつつも、抵抗ないし対抗力としては、より大きな仕切り直しこそが求められているのではなからうか。本書の問題意識や視点を共有しつつも、資本主

義的な発展形態の矛盾へのより本質的解明が必要だと思うのである。自然と人間の関係性に関しても、エコロジカルな関係性の再考案を前提にしつつも、「生命誌」的な系譜の奥底に隠れているヒト(ホモサピエンス)の本性への根源的問い直しも必要不可欠ではないか。

ここでその詳細にふれることはできないが、商業資本主義、産業資本主義、サービス・デジタル資本主義、それらを含み込む高度金融・投資資本主義への批判的検討や、その上でのポスト資本主義的な展望をどう見出すかが重要課題なのである。そして、サステナビリティを実現し見通すための道すじや手がかりを、マクロなパラダイム転換とミクロの草の根的な展開、その間を相互に共創的に結び付けるような各種レジーム形成が重要ではないと考えている。^{*1}つまり、過去や現状を点検しつつ、再度、仕切り直的に将来展望について模索していくことができないかどうか、そうした願いと期待を改めて強くかきたてられたというのが、本書を読んだ評者の偽らざる実感であり感想である。

【注】

*1 我田引水で申し訳ないが、編者の方々と同じような問題意識の中で評者なりの模索としては、『共生社会の論理 いのちと暮らしの社会経済学』(学陽書房, 1988年), 『共生時代の食と農 生産者と消費者を結ぶ』(家の光協会, 1990年), 『地球文明ビジョン 環境が語る脱成長社会』(日本放送出版協会, 1995年), 『食・農・環境とSDGs 持続可能な社会のトータルビジョン』(農山漁村文化協会, 2020年), 『今さらだけど人新世って? 知っておきたい地球史とヒトの大転換点』(WAVE出版, 2024年)を紹介しておきたい。

* 國學院大學